

「反対語・反義語」の諸相

塩谷 英一郎

0. 序論

「Aの反対語はBである。」このようなAとBの対応付けは、ごく普通の日常行為として行われている。特に、基本的な対応付けの多くは、母語の場合、幼少の頃から、比較的自然而身についている。しかし、反対語とは何か、どのような種類があるか、さらに、なぜそのようないく種類もの語の組み合わせを「反対語」と認識するか、に関しては、答えは意外と簡単ではない。

筆者がこのテーマに関心を抱いたのは、英語学の授業で、反対語を扱ったときにはじまる。いろいろな例を挙げていくと、思いの外、様々なタイプに出会う。さらに、このテーマには、もう一つの、しかし重要な問題がある。「段階性のある反意語 gradable antonyms」と「段階性のない反意語 non-gradable antonyms」の分類が、ことの外、単純にいかない。さらに、今日、Aを否定するとすぐにもう一つの極のBである、という誤った議論が時々見られる。

小論では、反対語の分類に関して、既存の分類を検討しながら、筆者なりに新たに考えたことを加えるとともに、「反対語」関係がどのような認知プロセスを経て広がったのかに関してアウトラインを示すことを目標とする。

1. 「反対語の分類」考

1-1 「反対語」の従来分類法

初めに、「反対語」の類語を検討する。

英英辞典を見れば、synonyms が同義語（類義語）を指すのに対して、

antonyms は日本語では「反意語」ないし「反義語」と訳されることが多い。「反対語」はこれを含む、より広い概念になる。¹

「反対語」は、意味論の英語の論文では opposites (「反対関係」は opposition) と表記されてきた。

「反対語」は、Crystal などの入門書 (Crystal 2003, Crystal 2010 等) では、gradable antonyms (段階性のある反意語)、non-gradable antonyms (段階性のない反意語)、converses と大きく3つに分類されてきた。

antonym の意味範囲は、言語学書の間でも違いがみられる。Lyons (1977)、ならびにそれを踏襲した Cruse においては、上述の Crystal の分類名称と異なり、Crystal などの non-gradable antonym は Cruse (1986, 2011) などでは complementaries と表記され、相補語と訳されたりする。相補関係は、「X は A か B のどちらかである」が真の命題である時の A と B の関係のことで、A と B は互いに相補語である、とすることができる。

gradable antonyms は、比較級の形がある形容詞の組み合わせが典型的である。long-short, high-low, large-small, hot-cold, good-bad, kind-cruel など、枚挙にいとまがない。

complementaries (non-gradable antonyms) として、Cruse では、dead-alive (死んでいる—生きている)、true-false (真—偽)、obey-disobey (従う—抗う)、inside-outside (内側—外側)、continue (V-ing)–stop (V-ing) (~するのを続ける—やめる)、possible-impossible (可能—不可能)、stationary-moving (静止している—動いている)、male-female (男性—女性) などが挙げられている。

converses は、「親」—「子」のように、「X は Y の A である」「Y は X の B である」ということが同義関係である場合の、A と B の意味関係であると定義される。このように、「反対語」の関係の一つの基本であるにもかかわらず、定訳は意外と一定していない。Cruse の翻訳本では「逆語」という日本語を当てている。また、もう少し固い訳語としては「换位語」あるいは「换位関係」というものもある。日本語の訳で何がよいかは考察を要することもあるので、小論では、英語名の converses (または converse

relation) で話を進める。husband–wife (夫–妻)、parent–child (親–子)、predator–prey (捕食者–餌食)、のような、名詞の組み合わせをこのタイプの一つの典型とみる考え方があるが、Cruse (2011) では、むしろ、「主語 X + 動詞 A + 目的語 Y (または to Y)」と「主語 Y + 動詞 B + 目的語 X (または from X)」、あるいは「X be 前置詞 (句) A + Y」と「Y be 前置詞 (句) B + X」が同じ事象を意味する、方向性のある動詞や前置詞 A と B の組み合わせをこのタイプの典型と考えている。例として、precede–follow (先行する–後続する)、in front of – behind (前–後)、lend–borrow (貸す–借りる)、bequeath–inherit (遺贈する–相続する)、buy–sell (買う–売る)などを挙げている。名詞の典型例と、動詞や前置詞の典型例を同一のモデルで考えるかどうかは、検討に値する。

なお、Cruse は、reverse という、もう一つの主要な反対関係を分類している。reverse は、「反転語」とも訳され、A と B が反対の方向を表す時に、A と B は反転語の関係にあるとすることができる。方向的反義語 (directional antonyms) という用語が使われることもある。Cruse は、例として、rise–fall (上がる–下がる)、advance–retreat (進む–退く)、enter–leave (入る–出る)、反転のもっと抽象的な例としては、2つの状態間の反対方向への変化 tie–untie (結ぶ–ほどく)、dress–undress (着る–脱ぐ)、roll–unroll (巻く–広げる)、mount–dismount (乗る–降りる)、などを挙げている。

このように、近年の概論書 (Crystal 2003, 2010, Murphy 2008 など) では、上記の gradable antonyms, non-gradable antonyms, converse、あるいは Cruse のように、antonyms, complementaries, converses, reverses という分類が基本にある。

小論では、さらなる分類が可能か、また分類されたものの関係は何か、このさまざまな「反対関係」はなぜ合わせて「反対関係」と考えることができるか、などを検討する。第2節では、議論の順として、[1] 関係的反義語 (relational antonyms, converses)、[2] 段階的反義語 (gradable antonyms)、[3] 方向的反義語 (directional antonyms)、[4] プロセスの反義

語、[5] 相補的反義語 (complementaries)、の順に検討をする。²

1-2 「反対語」のプロトタイプ

第1節でみてきたように、「反対語」と呼ばれるものには、いくつかのタイプがある。比較的違いのあるそれらのタイプが、なぜ、「反対語」という大きな概念に含まれるのであろうか。また、「典型的な反対語」、ひいては「反対語のプロトタイプ」というものはいかなるものであろうか。この節では、その問題を検討する。³

基本的な認知と、その範疇に入る反対語としては、以下のような例が挙げられる。

- (1) 身体空間 「上—下」、「左—右」、「前—後」
- (2) 視覚・視界 「大きい—小さい」、「広い—狭い」、「長い—短い」、「高い—低い」、「明—暗」、「白—黒」、clean—dirty、「見える—見えない」、「現れる—消える」
- (3) 刺激 (3-1) 刺激の強弱 「強い—弱い」、「うるさい—静か」
(3-2) 刺激の快・不快 「快—不快」、「甘い—辛い／苦い」、「良い—悪い」、「うまい—まずい」、fragrant—odorous
- (4) 人間関係 (4-1) 基本的な人間関係 「親—子」、「兄姉—弟妹」、「売り手—買い手」
(4-2) 性差 「父—母」、brothers—sisters、「おじ—おば」、「息子—娘」

(1) と (4-1) は converse の代表的な例と言える。いっぽう、(2) と (3) は、antonym, とりわけ gradable antonym の基本例を形成する。(4-2) は、幼児にとってかなり最初期に認知する相補語の例と考えることができる。

より根源的に理解する感覚はどれか、正確なところは、認知発達心理学の見解を待たなければならないが、(1), (2), (3) に関しては、乳幼児が (3-2) の刺激の「快—不快」から始めて、(3-1), (1), (2) と認知的理解を

拡張していくのではないかと推察される。大人の場合は、目が悪くなければ、視覚がとりわけ発達して認知の主眼になるが、感覚は、原初的な皮膚感覚から、次第に対象構築性をもって、視覚に至って認知が大きく発達するものと考えられる。

ただ、「反対」が最も明白に見えるのは、(1)である。「左—右」であれ「上—下」であれ、「反対」の最も基本的なスキーマを作る。最も原初的なスキーマである(1)を基にして、そのイメージ・スキーマにのっとって、比較的幼少の頃から認知される(3)、(2)、(4)にも「反対」の感覚が付与される。

「反対語」の定義として、よく採用されている定義は、「AとBを構成する意味のうち、一つだけが異なる意味を持ち、それ以外は同じ意味構成をなす」というものがある。たとえば、(4-2)などは、性の違い以外は(少なくとも定義的意味の点では)同じ意味から構成される(コノテーションはその限りではない)、とすることは可能である。

しかし、この定義では、不十分なところがある。たとえば、「暑い」の反対は「涼しい」のか「寒い」のか。「喜怒哀楽」はどの2つをとっても「反対語」のペアになるのか？日本語では、たとえば次のような対が反対語として結びつきやすい。「楽しい」と「つらい」、「楽」と「苦」、「うれしい」と「悲しい」、ただし、「笑う」の反対は「怒る」のか「泣く」なのか。「泣く」のほうをとる人のほうが多いと推測されるが、すると「怒る」の反対は？と、意外と不安定な場合がある。

「一つの意味カテゴリーの中にAとBが対になっていて、両者を構成する意味のうち、一つだけがちょうど『反対の』意味を持ち、それ以外は同じ意味構成をなす」と定義をすると、より正確にはなる。しかし、「対」とは何か、また「反対の」とはどういうことか、という問いが残る。

(2)や(3)の場合、さらに、両極なのか、同じくらい中程度なのか、という対応付けをすることが多い。「最大」の反対は、「やや小さい」ではなく「最小」が挙げられる。しかし、alwaysの反対はneverなのか。neverはalways notではあっても、not alwaysではないではないか。「熱い」

の反対が「冷たい」として、「温かい」の反対が「涼しい」のか。夏の会話では、「暑い」の反対が「涼しい」で、冬の会話では、「寒い」の反対は「暖かい」ではないか。このように、(2), (3) のように様々な程度・段階がある反対語の場合は、もう少しきめ細かな検討を要する。

2. カテゴリー毎に「反対関係」を考察する

「反対関係」の多様性と共通性を検討するにあたり、とりあえずカテゴリー単位で分類して検討するのが整理しやすい。

ただ、「カテゴリー」も一通りではない。一つは、1-1 で述べたような4分類法がある。もう一つは、「名詞」「動詞」「形容詞」などの認知プロトタイプによる分類法がある。ただし、品詞間の語彙の転用や、日本語と英語の品詞の違いにもあるように、細かいところでは綺麗に分類できるとは限らないが、比較的認められてきているところでは、「形容詞」になる語の認知プロトタイプとしては「性質」が多く、「動詞」は「事態」(その細分として、「プロセス」、「作用」、「変化」、「状態」などがある)、と考えられる。「名詞」の場合は、具象名詞から抽象名詞まで幅は広いが、「具象」・「事物」・「存在物」から「抽象概念」、「範疇の名称」に至る。ただ、具体的で多岐にわたるように見える名詞でも、「固有名詞」のように一つ一つの対象ごとに違う場合というものよりも、「範疇の名称」として使われるもののほうが辞書の語彙としては多い。

さらにもう一つのカテゴリー分類法としては、「分類式シソーラス」に見られるカテゴリー化がある。ただ、シソーラスの分類は、言葉の意味カテゴリーの多様性と分類効率の折衷として、100 近くに分類されることが多い。さすがにそれだけ細分化すると、共通点は見えにくくなる。そこで、先に述べた品詞プロトタイプを応用して、「具体的な性質」、「いくつかの事態」、「範疇をおおきく二分する概念」をピックアップし、最初に述べた4分類法と照合しながら、分類を再検討していきたい。⁴

2-1 関係的反義語

もっとも簡明な反義のタイプとして、[1]「関係的反義語」(relational antonyms)がある。2語が対称関係(symmetric relation)にあり、同一の関係や行為を両側からの視点からとらえるものと定義される。Cruseなどのconverseとほぼ重なる。両者があって成立する概念なので、原則としては片方の側からのみの行為・関係は普通無い。反対の語があって初めて成り立つというところがわかりやすい。

A、Bが、名詞、形容詞、(英語の場合は前置詞も含む)等の場合は、「XはYのA」「YはXのB」と言えるタイプのAとBの場合、[1]に該当する。動詞の場合は、「XはYにAする」「YはXに(あるいはXから)Bする」などの場合がある。

[1]の例として、以下のような例が挙げられる。

[1A] 方向

[1A1] 空間的 above–below / front–back / left–right / north–south / east–west

[1A2] 時間的・複合的 before–after / former–latter / older–younger (比較級) / senior–junior / part–whole

[1B1] 基本的人間関係(親族) parent–child / husband–wife / grandparent–grandchild / ancestor–descendant

[1B2] 社会関係 lender–borrower / employer–employee / teacher–student / 師匠—弟子 / 被害者—加害者 / landlord–tenant / leader–follower / speaker–listener / lawyer–client

[1B3] 自然現象の関係 cause–effect / predator–prey

[1C] 行為 give–receive / lend–borrow / sell–buy / employ–be employed / 勝つ—負ける

「反対」という言葉から幼児段階からまず簡単に連想できるもの、というイメージ・スキーマの出発点としては、[1A]、中でも、空間的な「前後」「上下」「左右」、次いで、時間的な「前後」であろう。[1A]は「反対」

概念の出発点ではあるが、older-younger の例からも分かるように、その多くは、一方では、後述の [2] の「段階的反義語」に発展する要素を持ち合わせている点で、[1B] や [1C] などと異なる。

[1B3] は、[1A] や [1B1] と比べると、科学的な認識などを要し、プロトタイプ的ではないが、概念としてはきちんとしたペアリングと考えられる。

[1B2] や [1C] の場合、概念的に対となるものが想定されるけれども、現実には不在、という非典型的な場合もある。日本語の「師匠」と「弟子」は大方の場合両方存在するが、teacher-student となると、「自学自習の学生」も存在しうる。「雇用主」と「従業員」の場合も多くの場合は両方存在するが、「雇用主」が社員が自分一人である場合や、「従業員」が協同で作る、などの例外も存在しうる。その中であって、「被害者-加害者」や lender-borrower が反対語の度合いが強く感じられるのは、「行為成立」とともに両概念が形成されるからである。

sell の場合、「販売中」というプロセスの場合と、「きちんと売れた」という売買成立の場合の両方があり、buy との両立は、典型的には「売買成立」の場合に成り立つ。また、ask-reply, question-answer も、多くの場合は向かい合う関係の例と考えられるが、「返事・回答を得られない」という場合もある。このように、「関係的反義関係」も、「行為」のレベルになると、「結果が出たときに成立」という条件が出たり、ask-reply のようにふつう「時間差」が生じるなど、「関係的反義関係」であるにしても、典型性が少なくなる。

このように、[1] のサブカテゴリーを比較した場合、「方向」、「親族」はしっかりとした「反対語」として認識しやすいが、「自然現象」、「行為」、「社会関係」となるにしたがって、「両立関係」としての認識が典型例から離れていくものと考えられる。

2-2 段階的反義性

「段階的反義語」(gradable antonyms) は、反義語のうち、2語の間に中

間段階が存在するタイプである。この関係にある形容詞は、典型的には、比較級・最上級をもつ。また、notで否定しても反義語と同義にならない(例 not large ≠ small / not happy ≠ sad)。段階的反義語の多くは、量や程度を表す修飾語をつけることが可能ともいえる。基本的には形容詞や副詞で、比較級を伴うものと考えることができる。

Cruse では、この範疇の反意語をいくつかのタイプに分類している。

(2-2-1) 極性型反意語 (polar antonyms)

long – short (長い—短い)、thick – thin (厚い—薄い)、wide – narrow (広い—狭い)、high – low (高い—低い)、deep – shallow (深い—浅い)、large – small (大きい—小さい) fast – slow (速い—遅い)、heavy – light (重い—軽い)、strong – weak (強い—弱い)、etc.

(2-2-2) 平衡型反意語 (equipollent antonyms)

warm – cool (暖かい—涼しい)、hot – cold (熱い・暑い—冷たい・寒い)、painful – pleasurable (苦痛だ—喜ばしい)、bitter – sweet (苦い—甘い)、etc.

(2-2-3) 重複型反意語 (overlapping antonyms)

good – bad (良い—悪い)、kind – cruel (親切な—冷酷な)、clever – dull (賢い・鋭い—鈍い)、pretty – plain (器量のよい—不器量な)、polite – rude (丁寧な—粗暴な)、etc.

Cruse は、これらのサブカテゴリーを、概略、以下のように説明している。

- ・「極性型」は、length (長さ)、height (高さ) など、ゼロから始まり、大きな値へと一方向の尺度からなる。
- ・「平衡型」は、尺度の中間に、どちらでもない箇所があり、その両側に、2つの尺度がある。たとえば、同じ物象を同時に「暖かく涼しい」ということはなく、ある段階を挟んで、どちらかを感じる。

- ・「重複型」も2つの尺度からなるが、「badの中のbetter」のように、「平衡型」と違って、対立する2つの尺度の一方の範囲に、もう一方の尺度を入れ込むことができる。

Cruseの三分法のモデルは、典型の類別としては機能するものと思われる。分類法の基準が比較的明確だからである。ただ、どの組み合わせがどのタイプに入るかに関しては、もう少し掘り下げられるものと思う。たとえば、painful-pleasurable, bitter-sweetの組み合わせに関しては、人によっては「重複型」と感じることもできるかもしれない。

(2-2-1)の「極性型」の場合、基本は、ゼロ以上の正の数で示される。実在物の計量可能な単位・尺度がこの概念の基本と考えられる。基本的な物理量が多い。

(2-2-2)の「平衡型」の場合、ある「中間程度」を境にして、どちらかを感じる。「中間程度の領域」を設定する点で、「極性型」より複雑になっている。wet-dryを「洗濯をすると、段階性よりも二者択一で判断するから[5]の相補タイプ」とアンケートで答えた学生もいたが、湿気の度合い、乾燥の度合いを考えれば、(2-2-2)であると言える。

ただ、言語使用者の意識として、二つの反対領域を分ける「中間領域」があるかどうかは、語によって決まるというよりは、言語使用者の意識によって分かれるところがある。warm-coolに中間領域があるとして、場合によっては、「極性型」に分類されていたheavy-lightにしても、主観的ながらも直感的な体感として「中間領域」を境にして判断する場合もある(競技で、「軽量級」「重量級」と分けるときなど)。また、Cruseが(2-2-3)の「重複型」に挙げたものでも、場合によっては、「平衡型」の意識で使用することもありうる。kindの反対がcruelだけかどうかという議論もあるが、仮にこの2つが反対語の組み合わせとして認められる場合でも、人によっては、また場合によっては、「重複型」というよりは「平衡型」の意識で使用することもありうる。また、いっぽうで、warm-coolも、季節とともに、その中間領域になる温度帯が変動するという点で、その設

定には、「主体的判断」がある。

逆に、一見「平衡型」に分類される場合でも、「重複型」にもなりうるという認識を持てるものもある。たとえば、bittersweet という語があるが、「慇懃無礼」と同じように、「重複型」でも概念構成が可能と考えられる。「苦一楽」も基本は「平衡型」であろうが、大人になっていくと、重複することもありうる。clean-dirty は、日常生活の感覚では (2-2-2) であるが、衛生学など認識が複雑になっていくと、認識者と場合によっては、(2-2-3) の感覚で使われることもありうる。

それでは、3つのタイプを特徴づけるものは何があるか。「極性型」は正の数で示される尺度で、計量可能なレベルのもの、「平衡型」は、基本、プラスかマイナスかのイメージを持ちやすい事象、「重複型」は、大人の世界のように複雑なもの、がそれぞれの典型であると考えられる。「重複型」は、同じ人物や事象に適用される場合でも、その人物や事象が複雑な要素から構成される場合に、いくつかの要素の間で同時に異なった判断が出る可能性がある、そこに「重複感」を感じる、と考えなおすことができる。

尺度型の反義語の場合、さらに別の問題もある。たとえば、

- (5) always – mostly – frequently – often – usually – sometimes – occasionally
– seldom – rarely – hardly ever – never

frequently/often と seldom/rarely あたりは、程度の問題として、比較的「反意感」が感じられやすいとすれば、それは「する／生じる」度合いと「しない／生じない」度合いが、反転して考えれば同じ度合だからであろう。ただし、not usually が、sometimes を意味するのか、seldom を意味するのかは、状況によって異なる。中心との距離できれいに「反意語の組み合わせ」と言えるかどうかに関しては、必ずしもぴったりとくるわけではない。always と never は、よく反義語の組み合わせとして挙げられるが、not always でもって never を意味することはめったにないし、never には ever

という反義語もある、と考えることもできる。語が「両極」になればなるほど、比較級の形を取りづらくなる。その一面を取り出して、always, never, (「凍り付くほどの」という意味での) freezing, boilingなどは「段階的」とは別のタイプの反義語を持つ、と考えることも可能ではあるが、同じ概念内での程度の差、という広い意味で、「尺度型反義語(段階型反義語)」の構成要素として扱うほうがまとまりがあると考えられる。always-neverのような組み合わせをどのように規定するのがよいだらうか。間に、frequently, usually, occasionally, seldom など中間的存在があるので「段階的」ではあるが、more や less と一緒に用いると、大方の場合、意味を成さない。このタイプの反義語の組み合わせは、「段階両極型」という分類が考えられる。名詞では、top, head-bottom などこの系列に入れられる。なお、empty-full も比較級がぴったり来ないとなれば基本的には「段階的両極型」と思われるが、half empty, half full などの表現もあり、中間段階の適語がない場合に両極の語彙に修飾要素を加えるケースもある、と考えられる。

同じく、freezing - cold - cool - lukewarm - warm - hot - boiling に関して、「両サイドの同じ程度のもの」が反義語の組み合わせとして挙げられることが多いが(たとえば、cool-warm, cold-hot, freezing-boiling)、夏という環境に身を置くと、「暑い」と「涼しい」、冬という環境に身を置くと、「寒い」と「暖かい」が反義語の組み合わせとして浮かび上がってくる。さらには、「性格が冷たい」の反義語としては、「性格が熱い」というよりは「性格が温かい」のほうがしっくりくる。

これらの例から考えられることとしては、一見一つの絶対尺度であらわされるように見える事象でも、多くの場合、何らかのフレーム内で、対極を意識することが往々にしてある、ということである。

反義性を表す語の形態として、否定の接頭辞として、英語であれば、non-, un-, in (im)-, dis-, anti- などがある。日本語であれば、「不・無・非」などがある。多くの場合は、否定の接頭辞が付くかどうかで2分されるものと考えられるものが多く、このタイプの分類は、基本は、[2] 段階的反義性というよりは、後に述べる [5] 相補的反義性と見なされるものが多い。

ただ、英語の de- や、日本語の「未」「脱」などのように、別のタイプの反義関係を形成しうるものもある。

しかし、一見典型的に [5] のタイプの否定の接頭辞の主に形容詞・副詞に見られるが、否定の接頭辞のついていないほうに、more や less を普通に付けられるものも多い。たとえば、

(6) likely-unlikely / possible-impossible / common-uncommon / accurate-inaccurate / expensive-inexpensive

これらは、ふつうは、左側のもとの語形のほうに、more や less を付けることができる。(接尾辞の場合でも、harmful-harmless のような類例がある)。これらは、Cruse の (2-2-1) の特殊例と考えることができるかもしれない。一定基準以下だと、右側の否定的なほうの語彙の適用領域になる。いっぽうで、肯定的なほうの語彙は、段階的尺度で示すことができる。

いっぽうで、否定サイドのほうにも、語彙的に、段階の違いを表すものが存在するものもある。

(7) polite-impolite, rude / secure-insecure, risky / interesting-uninteresting, dull / happy-unhappy, sad / kind-unkind, cruel

否定サイドに、単に否定の接頭辞を加えただけではない別の語がある場合、Cruse の (2-2-2) や (2-2-3) のように 2 つの極の存在が感じられ、否定接頭辞の語よりも、英語語彙の多くの場合、その語の重心は、より否定のニュアンスが強く感じられることが多い。否定接頭辞を付けた語彙の場合は、元の語のほうの重心から意識して入って行って、それとのつながりを感じる分、否定の重心がやや強くなっているからと思われる。

日本語の場合は、「不確か」「未確定」「非公式」などと比べ、「不正」「無礼」「非常識」となるとかなり強い意味に感じられるのは、後者は価値判断として「強い否定」をされる、ということも関係してきそうである。

なお、意味変化の結果、形態的には反義的に見えても、正確には反義性が感じられにくい例もいくつかある。uneasy の反義語だとたとえば calm などが候補に挙げられるだろう。「興味がある—興味がない」の意味で interested—uninterested であれば普通に反義性を感じるが、「公平無私」の disinterested になると、「利害がある」の interested 以上に、たとえば partial あたりのほうがびったり感があるかもしれない（が、そのいっぽうで、impartial は普通に partial のこの意味を含むいくつかの語義に対する反義になっている）。

次に、尺度型・段階性反義関係の場合でも、反対関係が微妙な例をいくつか見てみる。

まずは、感覚という比較的確かな分野でも、味覚などになると、対義語辞典の組み合わせに少し多様性がみられる。たとえば、sweet の反対語として、bitter になっていたり、sour になっていたりする。幼児期の典型的な快感である sweet の反対として何が感じられたか、どちらが原初段階で不快な経験として感じられたかという、個人の差が出そうなところである。また、英語では mild—hot, bitter のところ、日本語ではカレーなどで「甘口—辛口」など、組み合わせが思いのほか多様である。

ただ、メタファーのより意味転用した用法になると、(評価などが)「甘い—からい」、(思い出などが)「甘い—苦い」など、逆に単一尺度のイメージを持たせることも多いようである。

同じ語でも、語義のジャンルによって反義語が違ってくる例が時々あることは、日頃でも意識できているものも多い。たとえば、hard も tough も「固い」の意味の場合の反義語は soft だが、「大変だ」の意味の反義語としては、たとえば easy などがすぐに連想される。

次に、反対語同士で類語がいくつかあるケースというのがある。その中で何を選ぶか定まるもの、あるいは1対多の関係にならざるを得ないもの、などがある。

たとえば、large—small という組み合わせは、大きさだけでなく、large amount—small amount のように、かなり並行する。いっぽうで、big の反意

語としては little がよく挙げられる。large–small のほうが客観的な意味を共有し、big–little のほうが大きさ・小ささを気持ちを込めて強調する、という点で、それぞれ、共通要素が大きいものと組み合わせられると考えられる。abundant–scarce の場合、両者には、more–less, rich–poor などの類語もあるが、意味の守備範囲・使用範囲の面で近いものが組み合わせやすい例と言える。

clever–stupid, wise–foolish という組み合わせも、前者が行為一つ一つについて焦点を当てて述べるのに対し、後者は人格総合にかかわるという点で、これらもきちんと対応をしている。

いっぽうで、skinny/slender/slim と stout/fat/obese をどう組み合わせるか、という問題もある。ポジティブ同士、slender–stout, ネガティブ同士で skinny–fat/obese という対応のさせ方もあれば、ポジティブとネガティブ、たとえば slender–fat のほうが反対性が強くなる、という考え方もある。やや複雑なモデルと言える。

積極性と消極性／慎重の対比の場合は、行動だけでなく価値的にもポジティブとネガティブの度合いや適応範囲がちょうど対称になるものを組み合わせるのが自然のようである。たとえば、brave/courageous–cowardly (bravery/courage–cowardice, hero–coward), bold–timid, generous–mean, industrious–lazy, arrogant–modest など、いずれも組み合わせを変えると違和感が増す。

さらに、1 対多の例もある。たとえば、calm の反意語としては、agitated / bothered / distraught / distressed / edgy / frenzied / hysterical / nervous / panicky / restless / tense / troubled / uneasy / worried などを挙げることができる。これらの場合、「静」と比べて「動」のほうが多様であることが理由の例であると考えられる。気持ちの動転のほかに、興奮まで含めれば、excited を反対語に挙げる例もあるし、天候であれば stormy が反対語という一面もある。modern の反対語として ancient を挙げる場合と、old-fashioned などを挙げる場合とあるが、前者は歴史を大局的に見るのに対し、後者は歴史の「フレーム」をもっとずっと狭くとった場合の反対語と言える。

以上、段階的反義、尺度的反義について、主に形容詞・副詞を中心に見てきた。名詞の場合も、程度や計量を表す修飾要素を付けることができれば、広くこの反義性に入れてよいものと思われる。動詞の場合は、後の[4]、[5]を検討するときに再考する。

Cruseの三分法も参考にしながら、gradable antonymsの種類を整理しておしてみよう。[2-1]、[2-2]、[2-3]は、それぞれCruseの(2-2-1)、(2-2-2)、(2-2-3)を踏襲するとして、

- [2-1-2] (2-2-1)のサブカテゴリーとして、always-neverのような、「段階的な両極型」がある。
- [2-2-2] (7)のpolite-impolite, rudeのように、「極性型」と「平衡型」の両方の反義語を持ちうるケースがある。
- [2-3-2] 1対多の反義関係もある。反義語の意味する事態が複雑・多様になり、かつ同じような意味範囲をとる語がない場合に見られる。
- [2-3-3] 類語がたくさんある語同士の反義関係は、多対多になることもありうるが、意味の細部で対応付ける対語の選択が可能であれば、それが有力な反義語になる。

以上、「段階的反義関係・尺度的反義」に関して（まだいろいろでてくるではあろうが）ある程度掘り下げた。gradableなものを検討した後、non-gradableとされているもの、相補的反義関係を検討するが、その前に、典型的に動詞で現れる比較的わかりやすいタイプの反義性を検討する。

2-3 方向的反義性

方向的反義関係(directional antonymy, reverse)は、移動・到達・完成などへの方向性をもつ語と、その逆方向への進行を表す語の持つ反義性と規定される。空間的な意味合いの強いものと、人為やプロセスを表すものに大きく分かれる。

[3-1] 空間移動・物理的変化（およびそれらのメタファー）の方向性（自然現象・人為両用）：

（主に動詞）rise-drop / raise-lower / ascend-descend / float-sink / open-close / increase-decrease / expand-contract / lengthen-shorten / bend-straighten / inhale-exhale / grow-decline, age

（その他） forward-backward / input-output / clockwise-anticlockwise / ebb-flow / entrance-exit

[3-2] 主に人為行為の方向的反義：

push-pull / enter-exit / advance, approach-retreat, recede / go-come / arrive-leave, depart / cover-uncover / conceal-reveal / dress-undress / tie-untie / fold-unfold / scatter-gather / collect-distribute / import-export / get-lose / encourage-discourage / hire-fire (employ-dismiss) / bring-take / build-destroy / make-break / break-repair / produce-consume / 合成一分解

より細かい分類は別の機会にせざるを得ないが、大まかにいうと、(3-1) 空間的な反対方向がすぐに見える、(3-2) 大きさや数量や程度の変化の面で反対方向がすぐに見える、(3-3) 「ある状態を引き起こす」—「ある状態を解消する」、(3-4) ある視点から見ての「出入り」、といったような認知スキーマがピックアップできる。

関係的反義関係のうち方向が関係する [1A] との違いは、[1A] が同時に成立する関係であるのに対して、[3] は同時性はほとんど関係がないところにある（むしろ、同時的であることはかなり稀である）。また、尺度的反義関係 [2] は、概念的イメージとしては方向性があるけれども、その実質は、数量・規模・程度の比較であり、「行為や作用の方向性」とは異質のものである。

2-4 プロセスの反義性

既存の研究書の多くでは、[1] 関係的反義 (relational antonymy, converse)、[2] 段階的反義・尺度的反義 (gradable antonymy)、[3] 方向的反語 (directional antonymy, reverse)、そして次の節で扱う [5] 相補的反義 (complementaries) に4分類されてきた。遡れば、[3] を [1] ないし [5] の中に含める3分類法もあった。筆者は、いろいろ調べていくうちに、逆に、[3] や [5] に分類されてきたものの中から、時間軸を中心にしたもう一つの大きなタイプがあることに気が付いた。それらを総括する用語として [4] 「プロセスの反義性」と名付けておく。

[4] プロセスの反義性

[4-1] 始まり—終わり : beginning—end / start—stop / start—finish / first—last / appear—disappear / 誕生 (be born)—死 (die) / dawn—dusk / open—close

(そのうち特に人為的なもの): sow—reap / check-in—check-out (arrival—departure) / build—destroy / constrain, imprison—free (拘束・投獄—解放) / 入院する—退院する

[4-2] 状態—変化 進む—止まる / walk, run—stop / integration—disintegration / 準備・計画—実行 / 進行—中断 / 在学—卒業 / in hospital — out of hospital (入院している—退院している) / 生—死 (?)

[4-3] 中途—達成⁵

(achievement 型) 未完成—完成 / 未熟—成熟 / immature—mature

(accomplishment 型) study—master / 練習—本番 / drowning—drowned

以上のように、[4] は、基本として、テンス・アスペクト、とりわけアスペクトによる分類がメインである。[4-3] の場合、日本語では、「未」をつけると生産的に反義語が形成できる。いっぽう、英語などの場合、「進

行形」—「完了形」といった文法的な形で対比させることのできるケースもある。(同じ-ing—-edでも、「能動」—「受動」の場合は、[1]の关系的反義性に含まれる。)

従来、[4]が[3](一部は[5])と一緒にされてきたのには、それ相応の理由はある。物事には、「状態の変化」と「時間的経過」が共存している。[3]の例の中には[4]にも分類していい例もいくつかある。しかし、分類の観点は基本的に異なる。[4]に分類する場合は、イメージ・スキーマの中核をプロセスの時間軸に合わせる。また、「存在している期間」という意識も[4]のほうに強く出る。いっぽう、[3]のほうは、2つの状態に関して、双方向で考える。そう考えると、[4]の時間的対比では、滞在所の視点から、「到着—出発」、移動者の移動の期間としては「出発—到着」になる。[3]の場合は、滞在所「に入ってくる」「から出ていく」、という広義の「反対方向」に基づいて含めることになる。また、[3]の場合は、概念として反対方向があるにしても、両方が行われるとは限らないが、[4]のほうは、始まりがなかったり、終わりがなかったり、という稀なケースを除けば、[4]の反義性を意識できるケースは多い。

2-5 相補的反義

反義関係の中で、[1],[2]とともに多くの要素を持つものとして、[5]相補的反義性(complementary antonymy)がある。基本的定義としては、2語が非両立関係にあり、一方を否定すれば論理的に他方と同義になる(例 not dead=alive / not alive=dead)というふうの規定されている。

(8) alive–dead / married–single / awake–asleep / on–off / absent–present

(8)に関していうと、必ずしも割り切れるものではない例もある。alive–deadの場合、いわゆる「脳死の判定」のような問題もあるが、医学の理念としては、確かに二者択一でなければならないだろう。married–singleの場合、「事実婚」のような概念はあるものの、法律上は二者択一と言え

るし、法律とは別の尺度でも、カップルとしての恒常的なパートナーが存在するかどうか、で二者択一の判断ができると思われる。awake-asleep の場合、転寝のように、目が覚めたり意識がなかったりを短時間繰り返すことはあるが、「意識があったか、なかったか」で二分することは可能であろう。スイッチの場合、いろいろなタイプはあるが、もっとも単純な場合は、on-offで二分可能だろうし、機械を駆動できるくらい電流が入っているかどうか、は、機械の動作を見れば判定は付くであろう。「出席—欠席」は、時間幅を入ると「遅刻」や「早退」も出てくるが、その時その時で判断すれば、居るか居ないかのどちらかであろう。

また、この類の語には、not / no- / un- / non- / in- / dis-などを付けて反義語を作ることができる、と述べられてきた。

- (9) far-not far / conscious-unconscious / likely-unlikely / sane-insane / decent-indecant / fiction-nonfiction / honest-dishonest / like-dislike

(9) に関していうと、一見するとわかりやすい簡潔な話のように見えるが、more likely, less likelyのように、段階性もあるということは、[2-2-2]などで述べた。典型例は両立していることはないが、「どちらでもない例」や、「どちらも少しずつ入っている例」もある。たとえば、honestともdishonestとも言い切れない対応というのがある。like-dislikeにしても、「感情を排除して考える」ことは、大人であれば、むしろ感情的になる時間より多いのが普通だろう。また、「完全なfiction」というのはあるが、non-fictionの中にfictionが混じっていることは少なからずある。

カテゴリー化に典型例と非典型例・周辺例が存在する多くの日常現象においては、意外と「完全な相補性」でないものが結構ある。完全に近い相補性を探すとしたら、一つは「科学的定義」がはっきりしている領域、もう一つは、「総括的概念」の周辺あたりが比較的多い。

たとえば、数の分類はかなりはっきりしている。「偶数—奇数 (even-odd)」、「整数—小数 (integer number—decimal number)」、「有理数—無理数

(rational number-irrational number)」、「実数—虚数 (real number-imaginary number)」)。これらを見てみると、それぞれに、両者を含む全体、フレームが違うことに気が付く。「偶数・奇数」は「整数」に限定しての話、「有理数・無理数」は実数を基準にした分類、「実数・虚数」は複素数を基準にしての分類、等である。なお、「正の数—負の数 (plus-minus)」の場合は、ゼロを除いて考えれば「相補的」と言える。

物理・化学でも、自然現象に関する日常表現ほどでないにしても、数学と比べると、あいまいな領域も増えてくる。「無機物—有機物」などはきれいに分けられるとしても、「固体」—「液体」—「気体」には、ゼリー状、コロイド、霧状など、少しばかり微妙に境界をなすものもある。もう少し日常感覚的なところで、「昼—夜」があり、一見、「相補性」の有力候補とも思えるが、日の出直前や日没直後の明るさの状態を「夜」とは言い切れず、何時から何時まで「すっかり暗い」と言えるかの線引きは、感度に個人差があって、線引きは難しい（何らかの物理量の基準を規定を定めれば線引きも可能となる）、等、素人から見ると意外なほど線引きに神経を使っているものが多い。noisy-silent, light-dark など、感覚的な表現は、先述の wet-dry などと同様、言語習得段階では、明確な違いを認識していたであろうが、曖昧例を感得するにしたがって、non-gradable というよりは gradable である、という認識へと移行してくる。

生物の段階になると、たとえば、ミドリムシや原生生物などを意識しない日常においては、「動物—植物」は相当程度に相補的である。「落葉樹—常緑樹」は大まかな意識としては相補的と言えそうである。いっぽうで、「木—草」となると、プロトタイプ効果も強く、曖昧例が出てきやすくなる。

生物学から心理学・社会学にまたがる問題として、「性別」の問題がある。「生物学的な性 (Y 遺伝子のような遺伝学的な性、生理学的な性、生殖上の性)」、「心理統計的な性差、心理学的アイデンティティとしての性」、「ジェンダー論に議論になるジェンダー」と、少しずつ、複雑になっている。

(10) male-female / man-woman / father-mother / brother-sister / son-daughter

(10) のような例は、反義語の例として普通に載っている辞書や本も多い。1-2 の (4-2) で指摘したように、多くの幼児はかなり早い段階で、ある程度の識別をしている。「性差」は伝統的に「相補性」のカテゴリーに分類されてきたが、これからはどうなるか？反義性の議論では、「相補的反対語」の下位分類の際に、その多様性を反映することにして、話を先に進む。

「総括的概念」の場合も、「均等な相補性」は意外と少なく感じられる。

reality の場合、辞書によっては、反義語として、fantasy を挙げていたりする。形容詞形であれば、real-irreal という対応も可能であろうが、irreality という名詞形は英和辞典では載せないほうが多い。reality でない部分について、想像することはできても、それが reality でない領域全部をカバーしている、という担保が得られない。したがって、real でない部分に何を想定して全体の枠組みをどう構成するかで、反義語の候補が違ってくる。サイバー空間に浸っている人であれば、real の反対語として virtual を挙げる人もいるだろう（それでも virtual reality なる概念もある）し、reality に対して、fiction、surreal など、何を想定するかで違いが出てくる。

「同じ—違う」(same, identical-different) は、「相補的」の例として有力であろう。「類似の」とか「擬似的」とかいった言葉はあっても、「違うものは違う」ということはできる。ただ、多くの場合、「同じ」とは類概念として「同じ」ということが多く、「同じ」と判断する根拠はカテゴリー化であり、プロトタイプ効果の出るカテゴリーだと、「同じなのかどうか」迷うことも出てくるが、それは語彙関係の問題というよりは認識判断の問題と考えられる。

interior-exterior (内—外) は、位置として「より内側」「より外側」であれば [2] 段階的反義性の面を持ち、また、「A は B の内側」「B は A の外側」となれば、[1] 関係的反義の例にもなるが、ここで挙げる「内—外」はそれとは区別して考える。概念的にいえば「ある概念の集合に入る／入らない」ということで、集合論的な包含関係の図が成立する場合は、かなり有力かつ基本的な「相補的反義」の候補になる。inclusion-exclusion

のどちらか、と問われれば、「無関係」も広い意味で exclusion と考えれば) そのどちらかを答えることが多い。「関連性」といえば、relevant-irrelevant も「相補的」かもしれない(「ちょっとだけ関係がある」場合も「関係がある」という広い概念に入れる場合)。

次に、基本的な図を表す概念をもう少し見てみる。「直線—曲線」、「まっすぐ—曲がっている (straight—curve, crooked)」は、幾何学的概念としては、「直線は曲率ゼロの曲線」というテクニカルな言い方は別として「相補的」と考えることができる。ただ、人の性格に転用する場合は、言語表現が実情を単純化させてしまう危険性はある。図形の「線」という単純事象と、「人の性格と振る舞い」という複雑な事象の「複雑さ」の違いが、メタファー転義ではしばしば見られる。「単次元」では「相補的」でも、「複次元」では「相補的」と言い切れない。「比較的まっすぐな性格」、「ときどき曲折した考えを持つ」といったような表現から、メタファー転義の場合は、とりあえず「段階的反義性」の範疇に入るものと判断される。

horizontal—vertical は「相補的」かどうか。斜め線は、理論上は、縦ベクトルと横ベクトルの様々な程度の組み合わせで表すことができるが、「水平」か「垂直」か、という2つの機軸の選択と考えれば「相補的」に分類する感覚も全うなものである。この例から分かることは、「相補的」か「段階的」か、は、場合によっては、どういうカテゴリー内での比較かによって違ってくる例があるということである。

「自然—人工」、natural—artificial の場合、線引きの基準はいくつかあるかもしれない(全く人が手を加えないか、自然の成り行きに影響を与えない範囲まで認めるか、など)。理念としては相補的だけど現実としては絶対的な線が引けない、という例と考えることができる。

判断のカテゴリーになると、「理想—現実」、「理念—実相」で判断が異なってくるものもある。

true—false や、right—wrong となると、ヘブライズムやキリスト教の伝統など一神教の深層心理もあってか、西洋文明の一つの流れとしては2項対立的に考えたがる傾向が強い。ただ、国際化の今日、ネット検索してみた

ら、比較級も出てくる可能性もあろう。「半分正しい」「6割がた間違っている」といった言い方は、英語圏でも言う人はいてもおかしくない。

「guilty (有罪の) — innocent (無罪の)」の場合、裁くほうは判断に迷うこともあるだろうが、裁かれる本人は法に触れることをしたかどうか、「身に覚えがある」かないか、のどちらかではないかと思われる。(心神耗弱状態であれば「身に覚えがない」ほうになるかもしれないが、心神耗弱とは何か、といった心理学・精神医学的な議論になってしまうかもしれない。)

「drunk (酔っ払いの) — sober (しらふの)」は、確かに、酔いには程度があると考えれば [2] 段階性反義であろうが、道路交通の取り締まりなど、アルコール検知器にプラスと出るか出ないか、を考えると「酔っばらってもいないがしらふでもない」という表現は普通当たらず、取締官から見れば「相補的」と考える。

positive-negative は、数学や電気物理では「相補的」、心理や態度としては「段階的」と考えることもできる。「affirmative (肯定的な) — negative (否定的な)」の場合、平叙文というカテゴリーから見れば、「肯定文—否定文」は、否定要素の有無で、「相補的」と言える。ただ、総体的な意見表明の場合は、「半分だけ肯定(残りは否定)する」ということもある。(「半分肯定」のような言い方をどれくらい認めるかに関しては文化の差があるかもしれない。) 辞書的には、affirmative-negative の場合は比較級なし、positive-negative は語義によっては比較級あり、と記述しているものもある。

以上、やや微妙な部分もあるが、実相はともかく理念として、「相補概念」たらんとしている例が、判断関係の語彙にはいくつも見られる。

紛らわしいかもしれない例をもう少し検討する。

general-specific 「一般的」にもさまざまな段階があるので「段階型」、abstract-concrete も「抽象度」にも程度があると考えると、やはり「段階型」と思われる。

white-black は、色彩科学的には様々な灰色段階があると考えれば「段

階型]、カラー写真を白黒コピーしたり、「白黒をはっきりさせる」時には、やや強引に「相補型」に当てはめようとしていることがある。

「相補的反義」の例は、抽象的な概念から具体的な事物まで様々であり、網羅的に例を集めてサブタイプ分類をするのは別の機会に譲らざるを得ないが、「相補的反義」にも「境界に揺らぎ」のある例はかなりたくさんあることは、今までの具体例からも示唆されることである。

quality-quantity (質一量) 数理学の発達とともに、「質」も計量化する方法がいろいろ考案されているが、「量」を、個数や重量や長さなど、感覚に訴えるカテゴリー規定を加えれば、「相補的」な反義関係に入れられるかもしれない。ただ、「反義関係」として典型的な感じがしないのは、直線をはさんでの対立、というイメージスキーマが抽象的すぎて作りにくい、ということもある。

「相補的反義性」に関しては、さらにいろいろな例を検討しなければならないが、紙面等の都合により、次の機会にしたい。

ここでは、暫定的にまとめる。

- [5-1] 「相補的反義」は、典型的には、ある意味カテゴリー（と、そこに属する語彙の集合）を2分する場合に生じる。
- [5-2] 意味カテゴリーを2分割する場合、「意味の違い」の「反対性」が単純で明確なものほど、「反義語」と認識されやすい。
- [5-3] 「相補的」か「段階的」かは、線引きの必要性の有無によるところも大きい。
- [5-4] 2分された意味カテゴリーからイメージされる要素の豊富さの差が少ないほど、反義的なイメージを持ちやすい。

「相補的關係にある語」で「反対語」と認識されやすいものを鑑定するうえで、上記の要素がどのような相関関係を持っているのか、どの条件がどれくらい優先されるか、また、他にも基準とする条件がないか、など、「相補的反義」をめぐる議論は、さらなる検討を残さざるを得ない。

2-6 複合的な例について

概念が複雑になれば、様々な反義関係が一つの語に共存することが考えられる。とくに、行為や働きかけの動詞とその周辺には、いろいろな対照のさせ方が考えられる。

give の場合、「与える人」と「もらう人」は「関係的反義」であり、give と receive / take など関係的反義である。いっぽうで、take の場合、方向的反義として bring もある。

study の反対語として、関係的反義として teach が挙げられるが、学生の立場からすると、「遊ぶ」「怠ける」などに反義性を感じる、と答える人もいる。

「関係的反義」と「相補的反義」の両方が成立する場合は、人の行動の場合に普通によく見られる。以下の例でいえば、3つの対のうち、最初の2者は関係的反義、後ろの2者は相反する相容れない事態ということで、これまでの分類としては相補的反義に入れられると思われるものである。

request–grant–refuse, invite–accept–turn down, try–succeed–fail,
command–obey–disobey

複数の種類の反義が絡む例の分析は、まだまだこれからの課題と言える。

3. まとめ

小論では、一口に「反対語」と称されるものの中に、実にいろいろなタイプがあることを見てきた。Cruse の分類研究（とくに尺度的反義性の分類）を先行研究の一つの大きな成果と見ながら、「関係的反義」などをより細かく見、「方向的反義性」とは別に「プロセス上の反義性」がいくつあることを示し、「相補的反義性」でもきれいな二分法にはならない例が多いことも見てきた。

これらが「反対語」として括られるには、2つの語の間に、線的な対峙のイメージが持てるものほど、「反対語」というカテゴリーとして認められやすい、ということも見てきた。

「反対」の概念は、語彙を拡張するうえで一役買うが、同時に、ある概念と「対立概念」の2つしかないと考えることが、多くの場合、物事を単純化させすぎる危険を伴いうる。言葉の意味を考えるうえで、対立を単純化させてレッテルを張る不毛な言説を乗り越えて、語彙と表現の豊かさの価値を、意味の複雑さから感得してもらうほうに役に立つことを願っている。今回は、主に、「語彙の反対概念」であったが、文やコンテキストの様々な「反意」や多様な方向性、について議論を進める機会が得られればと思う。言葉の意味の複雑さに冷静に向かい合って、言葉の機能を、単純殺伐としたものでなく、多様な表現とともに豊かな考えをもたらすためのささやかな一歩となることを願って筆を措く。

参考文献

- Croft, Witham and D. Alan Cruse. 2004. *Cognitive Linguistics*. Cambridge University Press.
- Cruse, D. A. 1986. *Lexical Semantics*. Cambridge University Press.
- Cruse, D. A. 2011. *Meaning in Language: An Introduction to Semantics and Pragmatics*. 3rd ed. Oxford University Press. (片岡宏仁 訳 2012 『言語における意味』大修館書店)
- Crystal, David 2003. *The Cambridge Encyclopedia of the English Language*. 2nd ed. Cambridge University Press.
- Crystal, David 2010. *The Cambridge Encyclopedia of Language*. 3rd ed. Cambridge University Press.
- Fillmore, Charles J. 1978. On the Organization of Semantic Information in the Lexicon. *Papers from the Parasession on the Lexicon*. 148-73. Chicago Linguistic Society.
- 反対語対照語辞典編纂委員会(編集) 1998. 『活用自在 反対語対照語辞典』柏書房
- Jones, Steve 2003. *Antonymy: A Corpus-Based Perspective* (Routledge Advances in Corpus Linguistics). Routledge.
- Jones, Steve 2012. *Antonyms in English* (Studies in English Language). Cambridge

- University Press.
- Joshi, Manik 2014. Dictionary of English Antonyms. Kindle Book.
- Lakoff, George. 1987. Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind. University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. 1987. Foundations of Cognitive Grammar. Stanford University Press.
- Lyons, John. 1977. Semantics. Cambridge University Press.
- Murphy, Linn 2008. Semantic Relations and the Lexicon: Antonymy, Synonymy and other Paradigms. Cambridge University Press.
- Roget, Peter Mark, Lucas Nicolato 2011. Roget's Thesaurus — Definitive Edition. Kindle Book.
- 三省堂編集所（編） 2007. 『三省堂 反対語便覧』三省堂
- Shaik, Munan. 2014. Synonyms & Antonyms for IELTS, GRE. Kindle Book.
- Taylor, John R. 2003. Linguistic Categorization. 3rd ed. Oxford University Press.
- 山口翼（編） 2003. 『日本語大シソーラス』大修館書店
- Vendler, Zeno 1967. Linguistics in Philosophy. Ithaca, NY: Cornell University Press.

注

- 1 Lyons (1977: 270-280) には、当時の「反対語・反義語」論の集成がある。ここでは、「段階性の反義語」のみを gradable antonyms とし、それ以外を opposition と呼ぶ分類法も紹介されているが、本論では、全体として「反対語」で通してある。Cruse (1986) では、Lyons (1977) を受け継ぎ、第9章から第11章まで3つの章を割いて、「反対語」分類の一つのランドマークとなっている。Croft and Cruse 2004, Cruse 2011, Jones 2003, Jones 2012 も基本的に、Cruse 1986 の線でまとめている。また、用語の日本語訳として、片岡訳 (2012) を参考にした。

日本では、「反対語」情報をまとめたものとして、『活用自在 反対語対照語辞典』(1998)、『三省堂 反対語便覧』(2007) などがある。特に、後者には、「反対語」の種類や範囲をわかりやすく述べた解説があり、参考になる。

「対照語」は、英語文献では contrast に該当するもので、2つの語の意味関係をスキーマ表示したときに「正反対」に位置すると言い切れないが、意味の対照性を感じる場合に、「反対語」より広い意味で用いられる。(あるいは、広義の「対照語」から「反対語」を引いたものが、狭義の「対照語」と考えることもできる。)

たとえば、「甘い」の反対は「苦い」のか「からい」のか、は、味のカテゴリーの場合は、「正反対の1語」を決めることはできないが、比喩転用の場合、転用領域において、「苦い」に限定されたり「からい」に限定されたりするので、「反対語」の議論として含めてある。

- 2 反対語を探すにあたり、辞書情報を参考にした。反対語が載っている辞書はたくさんあるが、反対語としての許容量は辞書によってかなり異なってくる。たとえば、学習英英辞典の Oxford Advanced Learner's Dictionary は、Cruse などが antonym の代表とした「段階的反義」を中心にしながら、方向的反義語の例もいくつか載せてある。いっぽう、『ジーニアス英和大辞典』などは、それらに加えて、「相補的反義」「関係的反義」も多く載せている。Antonym を特集した辞典も多くあるが、基本的でわかりやすい空間的・物理的領域と比べ、心理的・認知的・社会的領域になると、辞書ごとに反義語の例にいくつかの違いがみられた。Joshi (2014) は、見出し数は手頃であるが、反義語の情報はやや簡潔すぎるくらいがある。他方、Shaik (2014) などは、学習辞典ということもあるが、周辺の・非典型的なものであっても、意味的に反対領域にあると思われるものは、かなり広く拾っている。また、カテゴリー単位で分類したシソーラス (Roget's Thesaurus など) の場合、意味分類で、反義語が隣り合っている例も多く、それも参考にした。

日本語関連の情報としては、先述の、『活用自在 反対語対照語辞典』(1998)、『三省堂 反対語便覧』(2007)などを参照した。

- 3 「典型的な反義性」と「非典型的な反義性」を議論するうえで、認知言語学のカテゴリー論を参考にした (Lakoff [1987], Taylor [2003])。イメージ・スキーマに関しては、Lakoff (1987)、それと似た概念でもあるフレームは Fillmore (1978) 等を参照。

また、名詞・動詞・形容詞の認知的根拠に関しては、Langacker (1987) を参照。

- 4 シソーラスは、英語では Roget and Nicolato (2011)、日本語では山口 (編) (2002) を主に参照した。シソーラスのカテゴリーは 100 近くにわたり、議論をするにはある程度まとめ直さないと、まとまりがつかなくなってしまう。ただ、シソーラスを参考にすると、意味分類の近辺に反対語が散見されており、その意味では参考になる。
- 5 achievement, accomplishment の概念に関しては、Vendler (1967) の基準を参考にした。

